

日本山岳会への提言

日本山岳会と自然保護

山川陽一

これまでも保護が開発かは、たびたび議論されてきたように、日本山岳会の重要な活動の一環に、自然保護に関する活動があげられる。過去4年間、自然保護委員長として活動してきた山川陽一氏に、自然保護と日本山岳会のあり方について綴ってもらった。

私は昨年度まで4年間、自然保護委員長を務めました。「出る杭は打たれる」のたとえがあります。この4年間、外からたたかれ、内から突き上げられて、力不足を痛感しながら、悩み、実践してきたありのままをここに披瀝して、会員各位のご批判を仰ぎたいと思います。はたして与えられた命題に

ふさわしい内容になるかどうかわかりませんが、この一石から更なる議論が生まれ、行動の輪が広がれば、今後の日本山岳会の展開に少しは寄与できるのではないのでしょうか。

日本山岳会が果たした役割

一部に「日本山岳会は山登りを

趣味とした人たちの集まりで、自然保護を標榜して集まった人たちの団体ではないのだから、あまり自然保護活動に深入りすべきでない」という意見があります。また、最近「自然保護委員会はいつかから森づくり委員会に変わったのか」というお叱りの声なども聞かれています。こんな声を聞くたびに、「われわれの活動も捨てたものではないぞー」と思うのです。なぜなら、物事はアクションがあるからリアクションがあるので、本筋さえ誤らなければ、少しばかりの行き過ぎや考え方のズレがあっても仕方がない。これはまさに、われわれがアクティブな活動をしている証拠ではないかと思うからです。何もしなければ反論も起きませんが、活路も開けません。

一例をあげましょう。昨年、伊那の入笠山一帯に大型風力発電ファームを建設するという問題が起きたときのことです。この問題をJAC内に提起したとたんに、自然保護委員会や理事会の中で、反対論、推進論、慎重論が入り乱れた議論が巻き起こりました。反対論の論旨は、「風力発電自体に反対するものではないが、それによってわれわれのフィールドである山岳環境に大きな改変をもたらすものであれば許しがたい」ということであり、推進論の主張は、「風力はクリーンで無尽蔵な自然エネルギーである。温暖化ガス削減の観点から、少々の山岳環境への悪影響は無視しても積極的に推進すべきである」というものでした。慎重論の代表格としては、「日

本山岳会は国に管轄される社団法人なのだから、国策で進める政策に抗する行為は慎重でなければならぬ」というようなものでした。それでは、この種の問題に直面したときの自身の考えはどうかという事です。『意思決定に至るまでは聞く耳を持って慎重でなければならぬが、一旦見定めがついたら、躊躇なく行動の人でありたい』ということであり、傍観者を決め込むことは山岳人として許されぬと思います。

歴史を振り返ってみましょう。今年単独の国立公園として再スタートを切った尾瀬国立公園の中心地である尾瀬ヶ原、そこにも、かつて、ダム水没の危機がありました。戦後の復興で電力開発が国の最重要課題だった時代です。そのとき、反対運動の先頭に立ったところが、日本山岳会の六代目会長であり初代の自然保護委員でもあった武田久吉でした。

また、尾瀬と並んで日本の代表的な山岳美を誇る上高地にも、四十数年前、上高地側から西穂高へ懸けるロープウェイ計画や、安曇野の三郷村を基点に、鍋冠山、大

滝山、六白山を越え河童橋に至るスカイライン計画が持ち上がっていました。そのとき、「一度壊された自然は元に戻らない」と述べて日本山岳会の中に自然保護委員会を発足させて反対に立ち上がったのが、十代目会長の松方三郎でした。

あ那时的ふたりの勇氣ある行動がなかったら、今日の尾瀬も上高地もなかったはずだ。

他方、あの幽玄で壮大な溪谷美を誇った黒部の溪谷が、戦前戦後にわたる大規模な電源開発の代償として無残な姿に変貌していきませんでした。今となつては取り返しがつきませんが、冠松次郎を代表格として黒部溪谷の探訪に歴史的かわりをもってきた日本山岳会が、自然環境を一変させたダム開発の過程でほとんど無力であったのは、われわれ山岳人として痛恨の極みではないでしょうか。

森づくりと山環ネット

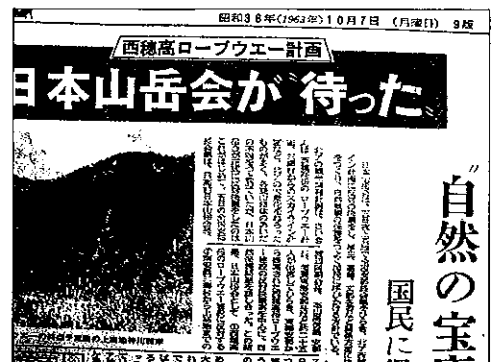
さて、二十一世紀を迎えて、いまや地球環境に対する世の中の認識は一変しました。官も民も、環境に背を向けた経済最優先の開発行為は論外という風潮になりました。

た。同じ開発問題でも、近年は、前出の伊那の風力発電問題のように、温暖化ガス削減という認識を共有したなかでの開発行為の是非であったり、大台ヶ原のように山岳環境の保全を進める上の方法論の議論であったりするのにつづく時代の移ろいを実感します。

このように、大きく時代が変わるなかでは、当然、われわれが取り組む活動内容の重点も変わってきます。近年、中心的に取り組まれてきた大きな問題として、次のふたつがあります。

ひとつは、ここ数年来、全国的な広がりを見せている森づくりの活動です。北海道支部の支笏湖周辺の台風被害復興の森づくり、青森支部のブナ林再生事業、東京の高尾の森づくり、東海支部の猿投の森づくり、岐阜支部の権現の森づくり、などです。

それぞれ、コンセプトはちがいますが、いずれも、地球温暖化防止や、失われた環境再生、より豊かな自然環境の創出につながる活動であり、JAC会員だけでなく一般市民と協働した社会的活動に



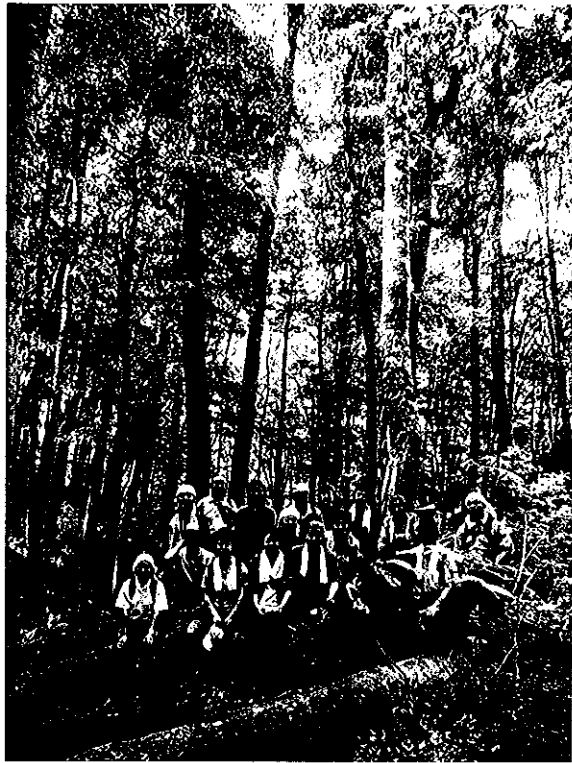
「上高地～西穂高ロープウェイ計画」阻止の新聞記事

なっているという点、いままでの日本山岳会の活動にはなかった特徴です。また、作業への参加を通して、小さな社会貢献ができるという心の満足と、アウトドアでいい汗を流す喜びを同時に味わえるところが、多くの会員に受け入れられている原因ではないでしょうか。

もうひとつは、「山の環境ネットワーク(山環ネット)」の活動です。登山の大衆化に伴って、われわれ登山者自身が、無意識のうちにかわり、時には加害者になってしまっている山の環境問題があります。

小さな集落が、村になり、町になり、大都会になるに従って、そのコミュニティの中で快適な共同生活を維持するために、新しいルールができ、守るべきマナーが重視されるようになります。それと同じことが、山においても起きています。高山植物の盗掘や踏み荒らし、山のトイレ問題、登山道のあり方、それらにつながる入山規制の是非などですが、われわれ自身の問題として、これらの問題の解決のため継続努力をしていこうという試みです。

この活動の特徴は、日本山岳会



白神山地のブナ林再生事業

の会員であれば、ネットを使って全国津々浦々誰でも参加できることです。試行錯誤の末、現在は、メーリングリストを使ってメンバー間の議論を進めています。発足後1年を過ぎ、ようやく軌道に乗ってきました。北海道から九州、小笠原までのメンバーが、距離のハンデを乗り越えて議論に参加できることは、なんと素晴らしいことでしょう。

地方からの動き

さて、自然保護委員会の運営体制は、本部のメンバーに加えて、

全国28支部に100名に及ぶ支部自然保護委員が選ばれています。これらのメンバーが、年1回顔を合わせ、各支部の活動状況を発表し、共通テーマを話し合う場が、自然保護全国集会です。

環境問題は、基本的に地方の問題（東京地方も含めて）です。地元に着した活動として支部が中心になって動くのが本筋です。本部は、大きな方向性やフレームを決めたり、全国的な問題に対処する以外は、支部の活動を助長するようサポートないしはコーディネーター的に動くのがいいと思います。支部によって、複数の委員で支部自然保護委員会を形成して活動しているところと、まだそこまで至っていないところとまちまちですが、いずれ、どの支部でも委員会を形成するようになれば、更に前進した活動が期待出来ると思います。

ら、自然保護委員会の活動も、常にJAC全会員に対して広く門戸を開放した活動を心がけていく必要があるでしょう。

活発な活動があるところには必ず人が集まります。地道に活動を積み重ね、その輪を広げていくことが大事です。また、成果を積極的に公表することで、対外的にも評価されるようになるでしょう。

その場が、2カ月に1回刊行している機関紙「木の目草の芽」であり、ホームページであり、全国集会です。山環ネットに参加して自分の意見を展開するのもいいと思います。会報「山」も、もつともっと活用させてもらいたいと思っています。

日本山岳会のメンバーは多士済々です。山の環境問題なら日本山岳会と言われるくらい、社会的にも輝きを増していきたいものだと思います。

